

巻頭言

岩井秀夫さんのこと
In Memory of Late Hideo Iwai

多系統萎縮症という難病を患っていた岩井さんが5月に他界された。車椅子生活が長引いて運動機能が衰えた結果、肺塞栓症で命を奪われてしまった。岩井さんは1981年からアルバック・ファイで、Auger, XPS, TOF-SIMS など素晴らしい装置を開発し、世界の表面分析の土台を支えた。2006年にNIMSに移ってからは、現場の分析と標準化に携わり、最近では表面分析研究会の副会長を勤め、ISO TC201のSIMSワーキンググループでも活躍していた。装置の開発、国際標準化のおかげで、海外にも岩井さんは知己が多く、岩井よりはHideoで通っていたそうである。こんな逸材が自分の技術を後に伝える前にいなくなってしまうのは、表面分析界にとって大きな損失である。

また、岩井さんのような職人が現場から少なくなっているのは寂しい限りである。

岩井さんは表面分析屋なので、スペクトルの正確さ、信頼性にこだわり、妥協を許さない。私はSEM屋なので、スペクトルは道具として見ており、分光した電子を使って像を作り何が言えるかを考えている。NIMS時代に彼とSEMの二次電子分光検出器として、噴水検出器の提案ができたことは、私の誇りである。残念ながら、岩井さんの病気が進み実験が満足にできず、結果として構想だけ先に進み、肝心の信頼性の壁を乗り越えられずに現在に至っている。もう少し彼の元気が続けば、噴水検出器も早く実用化されていたのではないかと思うと残念なことこの上ない。測定に妥協しようかなと考えたとき、心の中の岩井さんに相談することになっている。大抵「そんな駄目だよ」と言われるのであるが。

現在、コロナ禍で、殆どの大学でオンライン授業が続いていて、現場はたいへんである。

特に実験は難しい。TA (Teaching Assistant) がやっている実験をビデオで見せて、Webに載せたデータを解析させるなど、できる限りの工夫はしているものの、失敗などの実験の醍醐味を伝えることができず、隔靴搔痒の事態である。学生も匂いのないカレーを食べる心境であろうか？岩井さんは良くも悪くも武骨である。開発した装置もしかりと思う。岩井さんの開発した装置を使って表面分析の醍醐味を味わった学生が成長してくれることを祈る。

尚、岩井秀夫氏の遺志により、筑波大学に岩井秀夫基金を設立していただいた。この基金が電子ビームを使った分析技術の発展に寄与し、また教育の振興とこの分野の人材育成に役立つことを願っている。

関口 隆史 (筑波大学 数理物質系)